

● 教室(診療科)の特色 ●

新生児/低出生体重児を扱うNICUではハイリスク分娩にも立ち会い、急変すれば直ちに蘇生処置等を行う周産期医療の中心的役割を担っています。さらに循環器疾患、神経疾患/発達障害、内分泌疾患、アレルギー/膠原病、腎臓疾患、血液/悪性腫瘍疾患、消化器疾患、心身症など「子どものすべて」を扱う体制を整えているのが特色です。また、それぞれのユニットは協力して感染症等のプライマリケアと救急対応を実践することを通して、大学病院の高度な総合医療を地域に還元することを目指しています。



玉井 浩(たまい ひろし)教授(科長)

■ 専門分野

小児神経学、栄養学

■ 職歴

昭和54年 大阪医科大学附属病院研修

昭和60年 同 助手

平成 5年 同 講師

平成 8年 同 教授

■ 主な学会/専門医資格

小児科専門医/指導医、小児神経専門医、日本小児精神神経学会認定医、日本小児栄養消化器病学会認定医

■ 研究課題

ビタミンEの臨床有用性の証明、ダウン症児/発達障害児の言語発達分析と指導法の確立に関する研究

● 診療科の概要・特徴 ●

新生児から成人になるまで(思春期)のダイナミックに変化するライフステージを対象にしていますが、小児科医の基本的視点を養成するために、新生児/乳児からの正常な身体的/心理的な発達過程を理解することを重視しています。入院は、一般病棟(65病棟)は34床ですが、複数の他病棟の個室を使用しています。その他、NICU9床、GCU6床を有しています。外来は1日平均患者数100~120名ですが、すべての専門領域をカバーしています。 関連施設としてLDセンターを有し、連携して学習障害児などに対して言語コミュニケーション指導を行っています。

● 教室(診療科)指導医・上級医 ●

氏名(職掌)	専門医	参加学会
余田 篤(准教授)	小児科専門医/指導医、日本小児栄養消化器病学会認定医 日本消化管学会胃腸科認定医 日本超音波医学会専門医/指導医	日本小児科学会、日本小児栄養消化器肝臓学会 日本超音波学会
荻原 享(准教授)	小児科専門医/指導医 日本周産期・新生児医学会周産期指導医(新生児領域)	日本小児科学会、日本周産期・新生児医学会
片山博視 (診療准教授)	小児科専門医/指導医 日本小児循環器学会専門医/指導医 日本超音波医学会専門医/指導医	日本小児科学会、日本小児循環器学会 日本超音波医学会
芦田 明(講師)	小児科専門医/指導医、腎臓専門医/指導医	日本小児科学会、日本小児腎臓病学会、日本腎臓学会 日本小児腎不全学会、日本臨床腎移植学会 日本小児感染症学会、日本透析医学会
瀧谷公隆(講師)	小児科専門医/指導医 日本小児栄養消化器肝臓学会認定医	日本小児科学会、日本小児血液・がん学会 日本小児臨床薬理学会
新田雅彦 (講師/救急医療部兼任)	小児科専門医/指導医	日本小児科学会、日本小児救急医学会
井上彰子(講師(准))	小児科専門医/指導医、血液専門医/指導医 小児血液・がん専門医/指導医	日本小児科学会、日本血液学会、日本小児血液学会 日本小児血液・がん学会、日本造血細胞移植学会
島川修一 (講師准/中検兼任)	小児科専門医/指導医、小児神経専門医 日本てんかん臨床専門医/指導医	日本小児科学会、日本小児神経学会、日本てんかん学会
岡本奈美(助教)	小児科専門医/指導医 リウマチ専門医/指導医、アレルギー専門医	日本小児科学会、日本リウマチ学会、日本アレルギー学会 日本小児リウマチ学会、日本小児アレルギー学会

■ 連絡先：小児科(小児科学教室) TEL:072-683-1221

e-mail: ped001@osaka-med.ac.jp (玉井 浩) / ped016@osaka-med.ac.jp (瀧谷 公隆)

■ ホームページ: <http://www.osaka-med.ac.jp/deps/ped/index.html>

氏名(職掌)	専門医	参加学会
山岡繁夫(助教)	小児科専門医 日本周産期・新生児医学会周産期専門医(新生児領域)	日本小児科学会 日本周産期・新生児医学会
尾崎智康(助教)	小児科専門医/指導医 小児循環器学会専門医、不整脈専門医	日本小児科学会、日本小児循環器学会、日本循環器学会 日本不整脈学会、日本小児カテーテルインターベンション学会 日本川崎病学会、日本成人先天性心疾患学会
安井昌子(助教)	小児科専門医/指導医	日本小児科学会、日本周産期・新生児医学会
青松友規(助教)	小児科専門医/指導医、日本超音波医学会専門医 日本小児栄養消化器肝臓学会認定医	日本小児科学会、日本小児栄養消化器肝臓学会 日本超音波医学会
松村英樹(助教)	小児科専門医/指導医、腎臓専門医/指導医 日本臨床腎移植学会認定医、日本小児感染症学会ICD	日本小児科学会、日本小児腎臓病学会、日本腎臓学会 日本小児腎不全学会、日本臨床腎移植学会 日本小児感染症学会、日本透析医学会
福井美保(助教(准))	小児科専門医/指導医、小児神経専門医 日本てんかん臨床専門医	日本小児科学会、日本小児神経学会、日本てんかん学会
吉田誠司(助教(准))	小児科専門医/指導医 日本小児心身医学会専門医、心身医学専門医	日本小児科学会、日本小児心身学会
謝花幸祐(助教(准))	小児科専門医、リウマチ専門医	日本小児科学会、日本アレルギー学会、日本リウマチ学会 日本小児リウマチ学会、日本超音波医学会 日本整形外科超音波学会
篠原 潤(助教(准))	小児科専門医	日本小児科学会、日本周産期・新生児医学会
奥平 尊(助教(准))	小児科専門医	日本小児科学会、日本カプセル内視鏡学会
小田中豊(助教(准))	小児科専門医・小児循環器学会専門医	日本小児科学会、日本小児循環器学会、日本小児胎児心臓病学会 日本超音波医学会、日本Pediatric Interventional Cardiology学会、 日本小児循環動態学会、日本心エコー学会、日本小児感染症学会
金川奈央(助教(准))	小児科専門医	日本小児科学会、日本小児循環器学会、日本JPIC 1学会
契川智美(臨床研修指導医)	小児科専門医	日本小児科学会、日本小児脂質研究会、日本糖尿病学会 日本小児内分泌学会
蘆田温子(臨床研修指導医)	小児科専門医	日本小児科学会、日本小児循環器学会 日本循環器学会、日本成人先天性心疾患学会

初期研修プログラムの特徴

新生児から成人になるまで(思春期)の年齢特性をもつ小児において、すべての内科的疾患を網羅しているのが小児科であり、総合医です。すなわちプライマリーケアから小児救急、そして大学病院らしい特化した専門領域までを研修できるようにプログラムが構成されています。一般小児科と新生児科の2つの診療科に分かれていますが、プログラムは合同で作成し運営しています。

研修内容と到達目標

小児科は選択必修プログラムとしての2か月を1年目あるいは2年目に研修ができる。この他、小児科重点臨床研修プログラムでは2年目にNICU、大学病院において1年間にわたって研修するコースを設定している。また、これとは別に小児科臨床研修プログラムでは2年目に1年間あるいは6か月間、2か月間のコースも設定して、個人のニーズに配慮されている。

研修内容

- ① 入院患者の診察と治療法・基本処置手技の習得
- ② 外来患者の診察・診断能力の習得
- ③ 画像診断の理解と基本手技の習得
- ④ 症例発表(症例検討会、研究会・学会発表)
- ⑤ 抄読会発表

到達目標

- ① 周産期から思春期までの各年齢の特殊性を考慮した診断能力を身につける
小児薬用量、食事療法、心身医学的治療法を理解する

- ② 基本的検査・処置手技を実践できる
乳幼児の採血・点滴、髄液検査、骨髄検査、超音波検査などを実践
- ③ 特殊検査の理解と実践
腹部エコー検査、心臓エコー検査、ビデオ脳波、心理発達検査食物アレルギー負荷テストなど
- ④ 診療能力を向上させる
発疹性疾患の診断、けいれん時の処置、腹痛に対する診断と対応、先天性心疾患の診断と対応、超低出生体重児、極低出生体重児の評価と対応、小児救急疾患に対する診断と小児蘇生手技(PALS受講)の習得、小児膠原病・喘息の診断と管理、急性、慢性腎不全の管理、不定愁訴と心身症の診断と対応、小児糖尿病、肥満等の内分泌疾患の診断と管理、血液疾患、固形腫瘍などの診断と移植管理など
- ⑤ 社会医学・保健医療制度を理解する

評価方法

担当医となった受持患者について退院時要約、研修態度、診療技能について各ユニット長が各コース終了時に評価する。

週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土・日
7:30~8:00		抄読会				
8:00~9:00	症例検討会 入退院報告		受け持ち患者の把握			
9:00~12:00	病棟	一般外来 学生の指導	病棟	一般外来	病棟	週末日直 (2/月) 第2・4土および 日・祝日は休診
12:00~13:00						
13:00~17:00	病棟 学生の指導	病棟 学生の指導	病棟 学生の指導	病棟 学生の指導	重症回診 新患回診	合同勉強会(年3回) 各種研究会
	総回診	チーム回診	チーム回診	チーム回診		
17:00~17:30	患者申し送り					
17:30~19:00	各専門グループカンファレンス(下記参照)、指導医とともにふりかえり(1/月) 当直(1/週)					

各専門グループカンファレンス

新生児G 周産期カンファレンス(月曜日17:00~)
 血液G 小児血液・腫瘍グループカンファレンス(火曜日17:30~)
 幹細胞移植カンファレンス(金曜日 15:30~)
 循環器G 小児循環器合同カンファレンス(木曜日18:00~)
 心臓カテーテルカンファレンス(木曜日19:00~)

神経G 神経病棟カンファレンス(月曜日17:00~)
 消化器G 消化器カンファレンス(火曜日17:00~)
 膠原病・アレルギーG 膠原病・アレルギーカンファレンス
 (水曜日18:00~)
 心身症G 心身症カンファレンス(隔週月曜日17:00~)
 腎臓G 腎臓グループカンファレンス(火曜日17:00~)



小児循環器合同カンファレンス風景



血液・腫瘍グループカンファレンス風景



膠原病グループカンファレンス風景

後期研修プログラムの概要・特徴・研修方法・研修内容

本プログラムは小児科(科長:玉井浩)および新生児科(科長:荻原享)の合同プログラムであり、「小児医療の水準向上・進歩発展を図り、小児の健康増進および福祉の充実に寄与する優れた小児科専門医を育成する」ことを目的とし、一定の専門領域に偏ることなく、幅広く研修します。専攻医は「小児科医は子どもの総合医である」という基本的姿勢に基づいて3年間の研修を行い、「子どもの総合診療医」「育児・健康支援者」「子どもの代弁者」「学識・研究者」「医療のプロフェッショナル」の5つの資質を備えた小児科専門医となることをめざします。また、日本小児科学会の定めた「小児科医の到達目標」の獲得を目指して研修を行います。到達度の自己評価と指導医からのアドバイスを受けるために、「小児科専門研修手帳」を常に携帯し、定期的に振り返りながら研修を進めます。

専門研修3年間のうち2年は大阪医科大学附属病院一般病棟で感染症・呼吸器疾患・内分泌代謝疾患・心身症・血液腫瘍疾患・アレルギー疾患・膠原病・消化器疾患・腎泌尿器疾患・循環器疾患・神経疾患を担当医として研修し、周産期センターNICUで新生児疾患・先天異常疾患を6か月研修します。残る1年間は連携病院で1年間それぞれ担当医として研修します。3年間を通じ、外来での乳児健康診査と予防接種などの小児保健・社会医学の研修と救急疾患の対応を担当医として研修します。なお、重症心身障害児医療は、大学附属病院研修期間中に高槻市立療育園、西宮市立わかば園、藍野療育園で学ぶことができます。これらの研修を通じ、新生児から幼児期、学童期、思春期に至る小児および小児期からの疾患でキャリアオーバーした成人に至るまでを対象に健康小児の検診健康診査から小児救急医療にわたる小児に関する総合診療を習得することを目的としています。

また、日常の臨床から得られる様々な疑問を深く掘り下げ、臨床研究が可能なレベルまで指導を受けることができます。具体的には、学会報告や症例報告、臨床研究から論文作成を積極的に行います。小児科専門医は初期研修修了後3年の研修で受験可能であり、その到達目標を達成することを目的としています。

研修内容

NICUを含めた複数のユニットをローテートすることができる。

- 大阪医大周産期センターは新生児医療黎明期の開設以来30年を越える歴史があり、現在では、400g未満の症例を含めて、在胎週数28週未満、出生体重1000g未満の超早産超低出生体重児の生存退院率は95%近くに達し、大学病院付属の周産期センターとしては、全国屈指の施設の一つである。日本周産期新生児医学会の新生児専門医基幹施設であると共に、OGCS(大阪産婦人科相互援助システム)の基幹病院でもあり、胎児診断症例の母体搬送も数多い。対象疾患は、新生児外科症例を含めほぼ全てを網羅し、幅広い症例を経験できる。
- 循環器疾患領域では、年間100件以上の先天性心疾患の手術件数があり、小児心臓血管外科医とともに周術期管理を行っている。また胎児心臓病超音波検査施設に認定されており、数少ない小児カテーテルアブレーション治療が可能な施設でもある。先天性心疾患の診断、病態把握、治療、周術期管理、川崎病の診断と急性期治療、小児心不全治療、小児不整脈の診断と治療を理解・習得し、川崎病の冠動脈エコー検査、先天性心疾患のエコー検査、心臓カテーテル検査などについて習得することができる。
- 消化器領域では腹部疾患全般において、腹部X線、超音波、CTなどによる画像診断の学習ができる。また、乳児肥厚性幽門狭窄症の診断と治療や、腸重積の診断と超音波整復は古くから当施設では実施している。同時に急性腹症に対する診断と治療、炎症性腸疾患や慢性肝疾患に対する超音波、消化管内視鏡、肝生検なども施行していて、炎症性腸疾患、硬化性胆管炎、代謝疾患を含めた慢性肝胆膵疾患についても経験することができる。人工補助肝療法や血球除去療法などの浄化療法も必要に応じて施行している。また、当科では超音波、消化管内視鏡、肝生検なども小児消化器医自身が全例施行し、現在も複数の超音波専門医、指導医、小児消化器病専門医が診療に従事しており、種々の疾患が経験でき、画像診断などの手技についても修練できる。
- 血液・腫瘍領域では、白血病・悪性リンパ腫を含む各種血液疾患から固形がん全般にわたる小児血液腫瘍領域すべての疾患について診療を行っており、小児血液腫瘍医としての総合的な研修が行える。日本小児がん研究グループ(JCCG)に属し、最新の治療研究を行うように努めている。また血液内科と共に非血縁者間造血幹細胞移植施設・骨髄採取施設に認定されている。日々の診療により、骨髄穿刺、骨髄生検、腰椎穿刺、髄腔内注射、中心静脈カテーテル挿入などの基本手技を習得すること、輸血療法、抗がん剤治療、造血幹細胞移植、免疫低下時の感染症治療などの知識を習得することが可能である。
- 神経疾患領域では、小児期に発症する神経疾患全般、発達遅延をきたす症例、学校や日常生活に困難をきたす発達障害の症例を診療しており、広い領域を網羅している。小児神経専門医認定施設・

てんかん学会認定研修施設でありスタンダードな診療技術を習得できる。特にけいれん性疾患においては、ビデオ脳波同時モニタリングを用いた脳波分析による診断法を習得できる。またLDセンターでは学習障害の診断や診療を10余年にわたって行っており、小児の高次機能分析の最先端を学べる。研修で経験した症例を論文化することにも重点をおいており、アカデミックな研修環境を目指している。

- アレルギー疾患領域では小児気管支喘息や、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎等を診療している。小児科診療においてアレルギー疾患は感染症について多いcommonな疾患である。気管支喘息ではモストグラフを含む呼吸機能検査を、食物アレルギーでは食物負荷試験や緩徐型免疫寛容誘導(いわゆる経口減感作療法)を施行しており、診療ガイドラインに基づき、精密かつ個々の状況に合った診療・管理指導を取得できる。
- 小児リウマチ性疾患(若年性特発性関節炎・SLE・若年性皮膚筋炎など)領域では、希少疾患であり成人とは異なった病態生理を示すため、基点病院として専門診療を行っている。慢性の全身疾患かつ思春期発症が多く、内科・眼科・皮膚科・整形外科・リハビリテーション科等他科および心理士・ソーシャルワーカー等と連携した綿密な診療を習得できる。小児の関節エコーは専門医指導のもと読影・実技を行う事ができる。
- 腎臓疾患領域では、検尿沈査の見方から腎生検に至るまで、正確な診断を下すための検査ツール(検尿沈査の読み方、腎臓を観察するための腹部超音波検査、VCUGやDIP、CT、MRIなどレントゲン検査、DMSAシンチやレノグラムなどの核医学検査、腎生検、生検組織標本の病理診断など)を的確に選択、実践し、結果を正確に判読する。この検査結果に基づく正確な診断をもとにエビデンスに基づく治療法を選択している。末期腎不全患児に対しては在宅腹膜透析管理や腎移植など各関連科と協調し腎代替療法を導入している。これらの手技、診断のアルゴリズム、治療法選択が習得できる。
- 心身症疾患領域では、起立性調節障害の診断に必要なフィナブレース起立試験検査法や、自律神経機能評価法を習得できる。臨床心理士による治療介入もしており、心理テストの解釈や心理療法の習得もできる。また、軽度発達障害の診療および治療法についても習得できる。他に関西医大とともに野外キャンプによる不登校への治療介入も行っており参加もできる。
- 内分泌代謝疾患領域では、間脳・下垂体疾患、甲状腺疾患、副腎疾患や1型および2型糖尿病、肥満症、拒食症、夜尿症などの診療を行っている。生活習慣病に関しては行政と連携し検診事業に参加できる。また、1型糖尿病のサマーキャンプに参加でき、病態の理解に加え、患者家族、学校関係者、多職種医療関係者との交流を経験し、全人的医療を学ぶことができる。糖尿病、肥満症については小児科では数少ない学会認定教育施設となっている。



消化管造影検査



腎生検



NICUの風景

関連診療科との定期的な症例検討会など

- (ア) 幹細胞移植カンファレンス(毎週金曜日 15:30~)参加者:小児科医師、血液内科医師、リハビリ科医師、口腔外科医師、病棟薬剤師、理学・作業療法士、病棟看護師、リエゾン看護師
- (イ) キャンサーボード(毎月第1木曜日 18:00~、症例に合わせて)参加者:小児科医師、化学療法科医師、呼吸器内科医師、消化器内科医師、関連各外科医師、放射線科医師、病理部医師、がん専門薬剤師
- (ウ) 小児循環器合同カンファレンス(毎週木曜日18:00~)参加者:小児科医師、小児心臓外科医、麻酔科医、臨床工学士、ICU、病棟看護師、高槻病院小児科医、関西医科大学小児科医
- (エ) 神経カンファレンス 参加者:大阪医科大学小児科研修連携施設
- (オ) 小児消化器関連勉強会(2回/月、水曜日17:00~)参加者:関連施設小児科医
- (カ) 膠原病抄読会(2回/月、火曜日夕方) リウマチ・膠原病内科と小児科医師の合同抄読会
- (キ) 免疫・アレルギーカンファレンス(第4火曜日19:00~)参加者:大阪医科大学関連病院小児科医師、呼吸器内科医師、耳鼻科医師
- (ク) 心身症自律神経カンファレンス(1回/年)参加者:大阪医科大学小児科関連施設医師、臨床心理士

ハンズオンセミナー

腹部超音波検査、消化管内視鏡検査、心臓超音波検査、心臓カテーテル検査、アレルギー負荷試験、関節超音波検査、骨髄穿刺、腎生検、腰椎穿刺、内分泌負荷試験、起立負荷試験、周波数解析による自律神経機能評価

研修内容と到達目標

NICUを含むすべてのユニットをローテーションして、総合医である小児科医としての診療技術を向上させる。小児科専門医を取得できる症例を経験するだけでなく、症例発表を行い、論文作成を行う。

取得できる専門医

小児科専門医、小児神経専門医、てんかん専門医、消化器病専門医、内分泌専門医、リウマチ専門医、血液専門医、小児血液・がん専門医、腎臓専門医、感染症専門医、アレルギー専門医、新生児専門医、臨床遺伝専門医、小児循環器専門医、漢方専門医、心身医学会専門医、超音波専門医、内視鏡専門医、救急専門医

先輩医師のコメント



山崎 穂穂子 平成30年度後期レジデント
医局の指導体制、
雰囲気に着かれました

当院小児科の特徴は、小児科の中でも専門分野ごとに診療グループが分かれていることです。後期研修では数カ月毎にそれぞれのグループに所属し診療に携わることができます。各グループが専門分野に特化しているため、珍しい疾患や難治性・重症疾患を診る機会も多く、豊富な症例を経験できると考えています。また、関連病院で勤務する機会もあるため、commonな疾患に関しても十分に学ぶことができます。

私自身は当院で初期研修を行いました。小児科での研修は院内4ヵ月、関連病院2ヵ月しか選択していませんでした。しかし、短期間ではありましたが大学病院と市中病院の両方で研修したことで、軽症例から重症例まで幅広く診る機会があり、小児科の奥深さ、やりがいに魅力を感じ専攻に至りました。

これから小児科医として学んでいく身ですが、上級医の先生方の丁寧な指導を目の当たりにしており、今後どんどんレベルアップしていける環境だと思います。また、同期が5人と多く、悩むことがあれば気軽に話し解決へ向かっていける環境でもあると思っています。この良い環境を最大限に生かしていけるよう、日々精進していきたく思います。



難波 昂宏 平成29年度レジデント
各グループが相談し合い
専門知識を活かして診療

私は漠然と小児科に興味は持っていましたが、将来の専門科は決まらずに初期研修医になりました。様々な診療科をローテーションしましたが、小児科は非常に働きやすく、興味深い診療科であり、魅力を感じて入局しました。

医局の先生方は個性豊かな方が多く、毎日明るく仕事をされていることが印象的でした。そして、最も魅力的な面が症例の多彩さ、多さです。当科は専門分野ごとに9つのグループがあり、各グループの専門性も高い一方で、風邪のような一般小児も診療しているので、新専門医制度となった今でも困ることはないと思います。グループごとの診療を基本としていますが、複雑な病態の患者さんのことはグループ間の垣根なく、相談し合っています。専門科、専門分野を決めていない私にとっては最高の環境だと思い、小児科医として研修を始め、この1年間で大学病院でしか診ることがないような疾患も含めて様々な症例を経験しました。

診療業務以外の研修も大学の利点で、院内での症例検討会、抄読会に加えて、最近ではシミュレーターを使用した実技研修もあり、知識・技術の向上に適した環境です。院外の学会に参加し、手厚いサポートの上発表する機会も多く良い刺激になっています。去年、国際学会(アメリカ腎臓学会)に参加したことは良い思い出です。勉強意欲が湧いてくる経験でした。

小児科病棟の雰囲気も他の病棟と比較して明るく、子供たちが楽しそうに入院生活を送っています。忙しくないとは言えない科ですが、スタッフ一丸となって子供たちが元気になる為のサポートをしています。元気になった子供たちの笑顔を見るたび、子供たちの笑顔のために頑張ろうとエネルギーが湧いてくる科です。興味があれば、是非一度見学に来てください。お待ちしております。



藤井 裕子 平成28年度大学院生
研究に臨床。対等に切磋琢磨

初期臨床研修医として本学附属病院に勤務していた際に、慢性腎疾患の治療の副作用に苦しむ男の子を受け持ち、私はどうしてもこの病気を治したい、と思ったのが、研究をしたかったきっかけでした。本学には社会人入試枠があり、臨床医として働きながら、大学院としての研究を行うことができます。私は、大学院の4年間は研究を主体としながらも、臨床からも離れたくなかったため、研究にも臨床にも重きを置いている本学小児科を選びました。

私の基礎研究のテーマは、慢性腎疾患におけるフリーラジカル関連病態の解明であり、臨床研究においては、腎疾患と関連の深い循環器グループと共同で研究を行っています。また、自グループでなじみの薄い研究手法に関しては、他グループの先生にご指導いただいたり、自身の専門でない分野でわからないことがあっても、気軽に他グループの先生方に質問できる環境にあります。これほど各専門グループが揃っており、研究においても、また臨床においても、対等に切磋琢磨している小児科は他にないと思います。

研究に臨床にと忙しい毎日ではありますが、指導医の先生方が私のやりたいことを的確にくみとってください、ディスカッションし、試行錯誤しながら、楽しい研究生活を送っています。ぜひ、私たちと一緒にこどもたちの未来のための研究をしませんか。

参加学会

日本小児科学会／日本未熟児新生児学会／日本小児循環器学会／日本小児神経学会／日本小児血液・がん学会／日本小児アレルギー学会／日本小児腎臓病学会／日本小児内分泌学会／日本小児感染症学会／日本小児栄養消化器肝臓学会／日本小児心身医学会／日本小児臨床薬理学会／日本小児精神神経学会／日本小児救急医学会／日本小児リウマチ学会／日本小児放射線学会／日本周産期・新生児学会／日本てんかん学会／日本肥満学会など

大学院における研究活動

教育・研究指導方針

臨床的現象に即した問題提起と、基礎的根拠に立脚した問題解決への挑戦。

小児科には内科と同じようにほぼすべての領域を、しかも単独の科でカバーしている上に、特殊な新生児の領域も含んでいる。発達期にみられる臨床課題をテーマにして、指導医のもとに研究計画立案し、実行するように指導している。発達すれば国内外の研究施設との交流も行なっている。

現在の研究テーマとその概要並びに展望

①玉井 浩、瀧谷 公隆／小児栄養学、ビタミン学研究

①脂溶性ビタミンの生体内濃度調節の解明

②母乳分泌の調節機構

授乳時期により母乳成分構成は異なるが、乳腺細胞における脂質、タンパク質合成機構は不明である。我々は乳腺組織において、母乳分泌に関与する遺伝子群を同定した。現在、その遺伝子群の発現機構を検討中である。

②吉田 誠司／心身症・自律神経研究

心身症・自律神経グループは、子どものこころの診療方法の開発について心身両面から研究している。とくに、ハイテク装置を導入した脳循環、体循環のリアルタイム解析と生体リズムや生体ゆらぎを用いて、子どものこころの状態との関係を明らかにしている。

③岡本 奈美／小児膠原病・アレルギー学研究

①小児リウマチ性疾患および小児アレルギー性疾患における過酸化脂質の関与

②気道過敏性モデルマウスの作成と抗酸化剤の抗好酸球性炎症効果

③小児慢性関節炎における関節工コーの有用性と、健常小児における標準値の検討

④食物アレルギーやアトピー性皮膚炎患児におけるストレスマネージメント

④樊川智美、高谷竜三／小児内分泌・糖尿病研究

内分泌、糖尿病を中心に骨代謝、栄養、夜尿など幅広い疾患を診療対象としている。肥満症、メタボリックシンドロームについての研究を進めており、厚生労働省の班研究を活動の中心とし診断基準の策定に取り組んでいる。また、早期動脈硬化の研究会や小児2型糖尿病の患者支援ネットワークを全国に先立ち立ち上げ、注目を集めている。

⑤余田 篤、青松 友規／小児消化器病学研究

①小児炎症性腸疾患の病態と治療法

②小児消化管の粘膜免疫と炎症

③小児炎症性腸疾患の超音波機器を使った早期診断と機能評価

④超音波機器を使った消化管粘膜の機能解析

主なる関連病院

大阪労災病院／市立ひらかた病院／済生会吹田病院／済生会茨木病院／高槻赤十字病院／清恵会病院／北摂総合病院／八尾徳州会病院／第1東和会病院／大東こども診療所／みどりヶ丘病院／田中病院／サンタマリア病院／西宮市立わかば園

⑥井上 彰子、瀧谷 公隆／小児血液腫瘍学研究

腫瘍細胞における細胞死誘導機序解析

急性前骨髄球性白血病患者におけるレチノイン酸薬物動態、白血病及び神経芽腫細胞株における新規レチノイド化合物のポトース誘導機序やエピジェネティクス機構の解明などを中心に臨床研究／基礎研究を進めている。

⑦芦田 明、松村 英樹／小児腎臓学研究

フリーラジカル関連腎臓疾患の病態解明

ネフローゼモデルラットや急性腎不全モデルラットを作成し、各種酸化ストレスマーカーの測定やESRを用いて発症機序を解明している。

⑧片山 博視、岸 勘太、尾崎 智康／小児循環器学研究

①小児肺高血圧症に対する薬物治療の効果(高肺血流量型肺高血圧、慢性肺疾患、Down症候群)

②小児起立性定血圧、肥満児、川崎病患者における血管内皮機能の検討

③川崎病罹患患者の動脈硬化の検討およびビタミンEの内服効果の検討

④小児心不全患者におけるビタミンDの測定

⑤川崎病急性期におけるバイオマーカー測定およびその臨床的意義の検討

⑥川崎病急性期における心筋機能障害の心エコーによる評価(2D speckletrackingをメインに)

⑦小児肺高血圧症に対する左室機能の心エコーによる評価

⑨荻原 享、山岡 繁夫、安井 昌子、稲富 直／新生児学研究

新生児期は、胎内の液体環境から、胎外の気体環境へという、極めて大きな環境変化にさらされる時期であり、特に、早産児では、その影響が増幅される。その分子レベルでの要因の一つに、酸素や窒素から派生する、種々の活性物質による、臓器細胞障害が想定されている。我々新生児グループは、早産児特有の、新生児慢性肺疾患や、脳室周囲白質軟化症などの疾患を対象として、これらの活性物質との関連について、臨床研究のみならず、細胞レベルでの病態解明に取り組んでいる。

⑩島川 修一、福井 美保／小児神経学研究

てんかん発症の分子生物学的機構の解明

動物てんかんモデルの神経細胞死制御や神経細胞の分化誘導をおこなうことで、てんかん発作の制御ができることを利用して、てんかん発症の分子機構を解明する。

学習困難をきたす小児の病態解明

外傷、発達障害などの理由から、高次脳機能障害により学習困難をきたす小児に対し、その病態解明をおこない、治療法の開発を検討している。